

観光事業が軌道に乗れば来る客は幸せだろう。我々を悩ませたアブはいず、山好きな者はヒンヤリした沢ずたいに、又、気軽るに來たい者は近々出来る林道から車で足を入れる。夏は避暑がてらにきて、高山植物を雪溪の上から望み、山小屋では飯盒炊さん。秋は山あいで周りの紅葉した木々を眺めクルミを取るのもまた楽しいだろう。私の希望としては青海千里洞の全望を観る事が出来るようにしてもらいたいのだが。例えば、エレベーターを取付けて立体遊歩とか……。とにかく日本では洞窟といえば秋芳洞、安家洞で代表されるが如く横穴の女性的な美を想い浮かべる者が多いので、一日も早くこの雄々しい堅穴の厳しさの中的美を見てもらうことを願ってやまない。我々の手で探り全貌を明らかにし、今では一步一步眼を閉じていても歩ける程に知りつくし、愛着を感じている青海千里洞を……。

10. 探 検 記

—— 千 里 洞 へ の 挑 戦 ——

松 浦 順 一

8月3日、この日の為に我々は4月から種々のトレーニングやミーティングを重ねて來たのだ。上級生達の意気込みは僕達新入生のそれとは相当の隔りがある様に思えた。しかし僕はまだ日本最深の堅穴洞窟には一度も入ったことがないので本当に単純な動機で参加したのである。過去の資料や先輩の話等でそのスケールの大きさに対する疑問と驚嘆が裏腹になってふくれ上がるばかりでりであった。3日の夜、大阪駅を出発する時はこれから私等のやる事の大きさと自分の任務に圧倒されそうな気持であった。2日間に及ぶ荷上げも心が弾んだ。何故だろう。いつものボックトレーニングとは全々違う。大きな期待と成功の懷疑が胸をたびたびかすめる。「ブッシュを出て川原を少し上るとすぐだ！」と一先輩が叫んだ。川原におりてからの歩調は自然と速くなっていった。この頃からアブの大群に襲われ始めた。普通のアブよりは一まわり小さいものだが、この活動中常に悩まされた厄介者だった。8月4日、ベース・キャンプを設営し洞口までワイヤ梯子やザイル等を運んだ。ドリーネには残雪があるが、標高600mくらいの所に、しかも真夏でありながらどうしてあるのかよく分からなかった。又それがもたらす気温の変化には大変まいった。ベース・キャンプでは暑くてもドリーネを降り始めると肌寒くなり、洞口では一段と寒くなる。洞口附近の気温摂氏6度。僕と梅田さんが、昨年どうしても撤収できずやむなく洞内に放置

したワイヤ梯子等の腐蝕状態及び第Ⅴホールまでの様子を調べることになった。とてもうれしかった。光栄でもあった。雨カップをまといその上にジャンパーを着込んでの入洞である。不安と期待の入り交ったなんとも云えない気持である。「ガンバレヨ！」地上での最後の言葉である。ガチャガチャと一步一步プレートに足を掛けて降りて行く。寒さも加わって武者震いした。所々にオーバーハングがあってスムーズに降りられない。65m降下すると大雪渓が横たわっていた。またびっくり。それを巻いてチムニーを下り、第Ⅱホールを横切るとやがて第Ⅲホールの上部すなわち「孤独の滝」の上に来た。その下にはもう一つの闇の世界が横たわっている。他の者はその日はそこまでしか来ない。あとは梅田さんと僕のみ行動である。トランシーバー交信の時間を打を合わせる。まず梅田さんが降りる。又もや不安と胸のときめきが増して来た。70mの滝である。しかし水量はとても少ない。セルフビレーを再確認し足をプレートにかける。地下足袋に水が浸透してきて足の指が冷たさのため痛くなる。長い。とにかく長い。降りても降りてもまだ着かない。テラス状の所で腕を交差して少し休憩する。下を見ると右手の方に少し光が見える。先に降りた梅田さんのヘッドライトである。まだかなりある。けれど光を見ただけでも、初めての僕にとって安堵感が生じてきた。変なものである。とうとう底についた。「よく頑張った。」梅田さんの声が聞える。それは乱れた呼吸もおさまる一言だった。まず難関突破。ライトのとどきかねる第Ⅲホール（板鳳の間）。なるほどでっかい。浸透してきた地上の水がポトポトとこのホールの天井から所かまわず落ちて来る。所々にケルンがある。昨年のものだ。遺失品もたくさん見つけた。後方に昨年アタックキャンプを設営した砂丘があって、その時の活動を目のあたりに見る様な気がしてならなかった。それから約200m程の横穴が続く。ルート0と名づけられた体がやっと入るぐらいの狭い所を通過して第Ⅳホールに出る。その少し手前で多くの昨年撤収し得なかったザック、ジッヘル用ワイヤ、ザイル等を発見。地下水の増水による変化以外にも全くそのままだ。夫婦岩と呼ばれる大きな岩が2つある。そこから第Ⅴホールへ続く20mワイヤ梯子が流失せずに残っていた。しかしワイヤ梯子の下部の2、3のプレートははずれたりワイヤの通っている穴が削ずられて大きくなっていった。おそらく水流によってワイヤが振動し穴を摩擦したのだろう。そこを降りる途中で偶然にも昨年紛失した梅田さんのメガネを発見。そこからは五段坂へと続く。身をのり出す様にして進む。ゴーというすごい水の音がする。少し無気味だ。しかしもっと降りてみたい気もした。我々のスケジュールはここまでだ。地下300mの暗黒の世界。そういう実感があった。この時猛烈な空腹を感じる。それが孤独の滝に登り出す頃になるとひどい。それに疲労も加わってくる。昨年のすべての遺失物を集めて一ヶ所に置きタバコを一腹。実にうまい。装備回収している時のいら立ち、特にインターホーンのコードに枯木や

腐食植物がひっかかってなかなかとれなかった。風が無いので紫煙が目前に立ち込めて前方が見えにくくなる。濡れた手袋もほころびがち。70mの滝を今後は僕が先に上がる。所々で一ずつ休む。やはり降りる時とは然々違う。思うようにのらない。冷たさで痛みを通りこして足先の感覚はない。「急がなくていいからゆっくり登れ。」そんな梅田さんの言葉がまだはっきり聞える所までしか上がっていないのである。長い孤独が続く。自分の出す音のみしか聞えなくなる。ただ一途に登るしかない。腕を交差して一息入れる。又登る。やがて頭の上の方からかすかに森下さんの声が届いてくる。もう少しだ。その声がよく聞える様になってからもまだかなりある。やっと登りきった。「ゴツァンデス」交わす言葉にも浮き浮きしてくる。楽しい。そこで又々空腹に攻められる。梅田さんも上がって昼食だ。じっとしているので寒さがじんわりとくる。ガタガタ震えながらの食事であった。先輩のパンまで食べた。シャツが濡れて冷たい。しかしここまで来ると冗談の一つも言えた。そしてよく笑った。時計は午後2時をすでに回っていた。第Iホールに着く頃には淡々とした気持で上がっていた。今日の自分の任務は果たせたと感じた。真暗闇の中から久しぶりに見る地上の光。光にまで感激し、そして一杯のお茶にも。手よりも言葉救が自然とふえている。偵察は終え翌日からはアタック隊7名の入洞と同時にアタック隊用荷物の運び込みが行なわれた。洞内での3泊4日。7名にとっては苦闘の連続であっただろう。湿度100パーセント気温2.5度という厳しい条件の中で寝るのである。その間調査隊の活動。去年もやったが再び洞内測量、僕も荷物の運搬及び確保、洞内写真撮影に加わった。後で聞いたことだが、孤独の滝に登る者にとって確保している者のかけ声は非常に元気づけられてよかったとのことだ。声を出す者も寒さをまぎらす為にやっていた。自然とザイルを引く手にも力はいった。アタック隊員にしてみれば3泊4日は精神的にも大きな負担がかかっていただろう。僕は日帰りではあったが翌日は洞口作業であったのでかなり疲労も取れた。体験してわかったことだが、洞内での交わす言葉は人を大へん快活にさせいらだちの解消にも役立つということだった。8月10日撤収。2日ばかりで洞内に運び込んだ荷物やフィックスした梯子を1日で、しかも洞内にいるすべての隊員を上げながら撤収するのである。アタック隊員の者でさえも出てくれば直ちに撤収作業に加わった。洞口にいる者も疲労が蓄積されている、ましてや洞内にいた者は当然それ以上である。夕闇は迫るし小雨がばらついて来た。その上空腹も。荷上げしている者も確保している者もザイルを巻いている者も激しい疲労でムッとしている。洞内とのトランシーバ交信の言葉も乱れている。それでも撤収は続く。とにかくへとへとだ。しかしやらねばならない。疲労困憊とはこの様なことを言うのであろう。理性を失ってしまった様な怒号や失敗が頻発した。背中にはザックを負い両手には薄汚れたザイルやワイヤ梯子を手にも手に持ってベース・キャンプに引揚げる。



それでも記念写真撮影の時は騒ぐ程元気だった。すでに午後9時頃だった。ベース・キャンプへの途中の道は言葉少なかった。疲労がどっと出てきた感じだ。その日の夕食は確か11時を過ぎていた。生木に火はつかないし、水場は前日までの好天で遠ざかる一方だ。泣きたい心境である。とにかくそうしてその日は寝むいミーティングをして終えた。翌11日は洞口に残して来たザイルや梯子を運んだ。付近偵察の日発見した新洞窟（後に銀鳳洞と命名）については他氏にゆづる。大雪溪の第Ⅰホール、ロッククライミングしたチムニー、昼食した第Ⅱホール、身も心も凍てつく様な孤独の滝上部、生物が生息していないかと調べた

裏六甲「百間滝」のワイヤ梯子トレーニング ルート0等活動を終えた今では想いはさまざまである。しかし撤収の日、ドリーネの上の木立の中に太陽が落ちる時のドラマチックな光景は今でも僕の脳裏に何故か焼き付いている。そう見えるのもきっと僕らの洞内から出て来た時の身にまとっているものとはおよそ対象的だったからか、あるいは日常起きている事象にまで美しさを再認識してのことからかも知れない。「幻の大横穴」を発見するまでは、否たとえ存在していなくても黒姫山付近は徹底的に踏査してみる価値があると僕は考えるのである。特に湯水期である8月上旬における夏期活動には積極的に参加するつもりである。

—— われ千里洞に思う ——

北 条 孝 司

8月8日、朝から暗い雲が天空をおおっている。黒姫山のあたりには、黒色のガスがその尾根を抱くようにしてかぶさっている。今日は雨だろう。